

崇徳会研究・研修センター便り第2号「学会発表を通して得たもの」

(2024/12/19)

田宮病院こころのリハビリセンター 主任 橋爪卓

私は、2024年12月14日、15日に東京のお台場で開催された精神障害者リハビリテーション学会にて、当院の3病棟（精神科救急病棟）で実施している心理社会プログラムの予備的研究について発表しました（共同研究者：太刀川康知、木村皇平）。発表準備の過程では、抄録の作成からスライドの構成、質疑応答への準備まで、多くの課題がありました。その中で得た経験は非常に貴重なものでした。

「発表準備で得た新しい視点」

研究活動を行う中で、多数の関連論文を読む機会がありました。その過程で、同じテーマであっても多様な視点や方法論が存在することを知り、研究を通じて新しい知見を得る楽しさを実感しました。また、自身の発表内容を俯瞰することで、当院の取り組みが他施設と比較してどのような特徴を持つのかを再確認する機会にもなりました。

「学会当時の収穫」

学会当日は、発表後の質疑応答で参加者の皆さまから多くの示唆をいただきました。「参加者のリクルートがスムーズに行われている点に驚いた」という感想や、「プログラムへの参加頻度が高い群と低い群の要因分析を進めてはどうか」といった提案は、今後の実践や研究に大いに活かせる内容でした。さらに、当院のプログラムが病棟全体の取り組みとして浸透していることについて、多くの方々から評価をいただき、これまでプログラムに携わってきた歴代の担当者や現在の同僚に対して改めて感謝の思いを抱きました。

「まとめ」

今回の経験を通じて感じたのは、研究発表が単に自身の取り組みを伝える場であるだけでなく、他者の意見を取り入れて次のステップを考える契機となることです。

この記事を読んでくださっている方の中には、学会発表の経験がない方もいらっしゃるかもしれません。学会発表は時間も手間もかかる一方で、それ以上の学びや成長を得られる機会だと感じています。これを機に、研究活動や学会発表に挑戦してみようと思われた方がいれば、ぜひ一步を踏み出してみてください。

